



TITLE:

転換期を迎えた大学図書館

AUTHOR(S):

井村, 裕夫

CITATION:

井村, 裕夫. 転換期を迎えた大学図書館. 静脩 1996, 33(1): 1-2

ISSUE DATE:

1996-10

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/37430>

RIGHT:



転換期を迎えた大学図書館

京 都 大 学 総 長 井 村 裕 夫

数年前オックスフォード大学を訪問したとき、有名なボードリアン図書館を見せて頂いた。古い伝統と蔵書数の多さもさることながら、組織がしっかりしているのに感心した。例えば、私の案内をしてくれた日本人の司書は、日本・中国の専門とのことであった。日本の大学の図書館で、外国人の司書がいるところがどのくらいあるであろうかと、ふと考えたことを憶えている。

この図書館は、古い建物と蔵書をそのまま残しているのも一つの特徴である。それはまさに「学の殿堂」と呼ぶに相応しい雰囲気をもっており、オックスフォード大学の歴史が感じられた。鎖でつながれた書物も残っていたが、かつて図書がいかに貴重であったかを示すものとして興味があった。井上靖の「天平の甕」に出てくる、一生を写本で過ごした僧侶のことを思い出した。この鎖は、かつて書物が命と同じく重いものであったことを私達に教えてくれるように思えた。

大学の図書館の難しさは、本館のほかに各部局にどのように分館あるいは分室を配置し、その間をどのように連絡をとるかということである。オックスフォード大学でも、各コレ

ッジや研究所にも図書館がある。例えば、私が訪問したマートン・コレッジにも図書室があり、かつてこの学長を勤めた血液循環の発見者、ハーヴェイの使っ



た部屋も保存されていた。京都大学にも現在中央図書館のほかに、およそ60の大小様々の図書館ないし図書室が存在すると考えられている。講座単位のものまで含めると、更に多いかもしれない。

研究者にとってはできるだけ身近なところ

に図書室があることが望ましい。従って本館のみでなく分館も十分充実させることが理想であることは言うまでもない。しかし、図書も雑誌も年々発行数が増加し、値上がりも決して軽視できない。しかも図書購入の予算は限られているし、人員にも制約がある。その中で、研究者や学生のニーズに応えられるように、どのように図書を配備するか、そしてその間をどのように結ぶかが大きい課題である。図書の重複をできるだけ避け、購入したものを有効に利用しないかぎり、大学の図書館機能の維持は大変難しくなるであろう。

そのためには電子図書館的機能が不可欠となってくる。電子図書館とは、「電子的情報資料を収集・作成・整理・保存し、ネットワークを介して提供するとともに、外部の情報資源へのアクセスを可能とする機能をもつもの」を言う。この電子図書館機能が整備されれば、利用者は図書館に行くことなく、的確、迅速に、そして時間の制約を受けることなくサービスを受けることが可能となる。そうすれば各部局で図書や雑誌を購入する必要はほとんどなくなり、大変効率がよくなる。幸いにして学内LANは整備されており、各部局の端末も増加している。電子図書館へのインフラストラクチャーは、かなり整ってきていると見てよいであろう。

文部省学術審議会は、「大学図書館における電子図書館的機能の充実・強化について」という建議を文部大臣に行った(平成8年7月)。これによって大学の電子図書館化は加速されるであろう。もちろん電子化を推進するため

には解決しなければならない問題がかなり多い。例えば、目録情報の遡及入力、資料電子化の効率的・段階的な実施、施設・設備の整備、職員の研修の充実などである。また著作権も大変難しい問題で、高い使用料を払う必要があると、折角電子化を行ってもあまり利用されない結果になってしまう。この点慎重な検討と事前の協議が必要であろう。

大学図書館の電子化は、現在奈良先端科学技術大学院大学でのみ行われているが、学術審議会の建議によって急速に広まって行くものと考えられる。従ってここ数年の間に、図書館の機能が大きく変化する可能性は極めて大きい。研究者は図書館まで足を運ばなくても、コンピュータのキーボードを叩くだけで、たちどころに必要な文献を読むことができるようになるであろう。学術雑誌は電子化され、姿を消してしまうかも知れない。更に極端な言い方をすれば、図書館の閲覧室も不要となるかも知れない。

しかし、私のような古い人間は、現在の図書館の形態と機能も是非残してほしいと思う。多忙な教育・研究の合い間を縫って、図書館の高い天井の下で、新着の雑誌や新刊書に目を通すのは、安らぎと、そして知的亢奮を同時に味わうことのできる至福の時である。オックスフォード大学の図書館のように、長い学問の伝統に充ちた施設であれば、更に素晴らしいであろう。かつて先人が生命をかけて筆写し、あるいは外国から持ち返った書物は、やはり学問の原点である。それに直接触れることのできる空間が是非欲しいと思う。

GeoRefのネットワーク利用について

前 理 学 部 図 書 掛 長 慈 道 佐 代 子

(現在：附属図書館参考調査掛長)

1. はじめに

このたび、GeoRefを学内3部局(理学部、総合人間学部、防災研究所)で分担購入し、

附属図書館のCD-ROMサーバ機により、全学でネットワーク利用出来るようになった。皆様に利用していただけるようになったのは、5月半ばからである。